ムーラン・ルージュ新宿座

赤い風車
昭和の初期に馬喰横町といわれていた武蔵野館通りの奥、甲州街道の隆橋の手前右側にあったムーラン・ルージュ新宿座は、屋根の上にその名のとおりの赤い風車がくぐるまわる小さな劇場で、そこで上演される軽演劇とレヴューは、山の手の学生やサラリーマンたちの人気を集めていました。

浅草軽演劇
もと映画館だった新宿座にパリのレヴュー劇場名をそのままとったムーラン・ルージュという名の劇団が、初めて芝居とレヴューを上演したのは昭和6年(1931)12月31日のことでした。当時は、左翼演劇集団に対する弾圧が厳しくなり、また一般商業演劇も盛り上がらない傾向で、国全体が不況にあえぎ、しかも上京戦争ほど向かいつつある暗い空気に包まれていた時代でした。この暗い風潮に反発するように、人々は浅草のカジノ・フォーリーの新しいレヴューと軽演劇に熱中し、そのスターであるエノケン(桜本健一)やロッパ(古川綾波)、シミキン(清水金一)らが笑いを振りまく玉木座、金龍館、常盤座などに拍手を贈っていました。玉木座で支配人をしていた浅草オペラ出身の佐々木千里は、このレヴュー流行の風潮に目をつけ、山の手のイテリ GLsizeiを対象に、当時目覚ましい発展ぶりを見せていた新興の街、新宿に旗揚げしたのがムーラン・ルージュでした。

ムーラン旗揚げ
ムーラン・ルージュは、当時新興芸術派として脚光を浴べていた作家の龍胆寺雄、吉行エイスケ、樫崎健を文芸部の看板として顧問に迎え、カジノ・フォーリーの文芸部長だった島村竜三を実質上の責任者としてスタートしました。開演当初はカジノや玉木座の再演が多く、客足も芳しくなかったため、経営難で佐々木が競馬で当てた金を座員の給料にまわしたというエピソードも残っています。